佳作

感謝の大切さ

秋田県秋田市立泉中学校
１年　齊藤　結奈

「礼儀・感謝・結束」これが私が所属していたバレーボールのチームのモットーだ。入った当初は「チームにモットーがあるんだ」くらいにしか思っていなかった。しかし、今となってはこのモットーの大切さを少しは理解できた気がする。

私がこのチームに入ったのは小学５年生のとき。もともと小学１年生からやっていたが、父の転勤により、引っ越してこのチームに入ることになった。指導者が元五輪選手で強いと有名なチームだった。緊張とワクワク感を胸に、初めての練習に参加した。チームのみんなが上手でとても楽しかった。それから月日はたち、あっという間に６年生になった。チームで全国大会を目指していた。毎日のきつい練習の中でも、先生から「日々周りの人たちに感謝するように」と言われていた。でも今、振り返ってみると、そこまでできていなかったように思える。それから私のチームは目標を達成し計２回、全県優勝することができ、全国大会に行く予定だった。しかし、コロナウイルスの影響で全国大会は中止になってしまった。とても悔しかった。

私はあっという間に卒業し、中学生になった。私のチームはいろいろな小学校が集まっていたため、一緒にバレーをした仲間とは離れ離れになってしまった。全然会う機会もなく、とてもさびしい気持ちでいっぱいだった。いつも週４回以上練習があったため、当たり前のように会えていた。そのありがたみを本当に感じられていなかったと思う。私は仲間が大好きだ。本当に仲間に恵まれた。毎回の練習が楽しかったのは仲間のおかげだし、つらいときには励ましてくれた。当たり前にいてくれると思っていた自分に後悔した。それでふと「日々周りの人たちに感謝するように」という先生の言葉を思い出した。私はそれを言われて、保護者や指導者のことばかりだと思っていた。いやもちろん、保護者や指導者への感謝は大切だ。私の見えない所で、たくさんサポートをしているに違いない。だが、私は大切な人たち「仲間」への感謝を忘れていたのだ。でももう二度と一緒のチームになることはできないと思っていたとき、私が所属していたクラブの中学生チームが発足した。感謝することができなかった仲間とまた一緒にバレーをするチャンスを与えられた。本当にうれしかった。「今度こそは毎回の練習で大好きな仲間とバレーができることへの感謝を忘れない」と心に決めた。それから毎回の練習が本当に楽しかった。しかし、私は

中学生チームの練習が始まってすぐ腰の骨を折るというけがをしてしまった。せっかく楽しくなってきたところでどん底に落とされたような気分になった。みんなが一生懸命、楽しそうに練習している姿を、見学することしかできなかった。「みんなは、バレーができていいな」そんなことばかり考えていた。私は小学１年生からバレーをやっていたため、バレーと共に生きてきた。今まで大きな怪我はなく、何も不自由なくバレーをやってきた。だから忘れていたのかもしれない。バレーをやれる素晴らしさを。結果的にこの怪我は良かったのかもしれない。自分を見つめる良い機会になった。自分はきちんとバレーが好きなんだと知った。そして約２カ月後、待ちに待った復帰。「私は大好きなバレーを大好きな仲間とすることができて本当に幸せ者だな」と思った。

私は「大切なものは失ってから気づく」という言葉を聞いたことがある。確かにその通りだと、今回の出来事を通して思った。だが、大切なものは失ってからではおそいと思う。人は、当たり前になっていることほど、それは当たり前ではないと気づきにくい。だから、どんなことにも常に感謝するべきだと気づいた。そうすれば後悔することも減ると思う。常に感謝していれば「自分はこんなに幸せ者なんだな」と思うことができるはず。このことを大人になっても忘れず続けていきたい。そうすればきっと楽しく、素晴らしい人生を送ることができると思う。

中学生になってまだ半年も経っていないが、当たり前なことほど大切さに気づきにくいということと、感謝の大切さを学んだ。なぜチームが「礼儀・感謝・結束」をモットーに掲げているのか、まだほんの少しかもしれないが、分かった気がする。私は今回の経験を糧に、短い中学校生活、全力で感謝し、後悔のない、楽しい毎日にしたいと思う。